

SINUSOID NEWS

肝類洞壁細胞研究会ニュース

第 8 号
2007 年 1 月発行

目次

- ・故浪久利彦先生を偲ぶ…………… 谷川久一…………… P 1
- ・ビルバオの思い出に感謝を込めて…………… 内藤 眞…………… P 2
- ・第20回肝類洞壁細胞研究会を主催して…………… 藤井秀樹…………… P 3
- ・第21回肝類洞壁細胞研究会のお知らせ…………… 恩地森一…………… P 4
- ・会則、平成17年度会計報告（事務局分）、役員…………… P 4
- ・編集後記…………… 谷川久一…………… P 4

故浪久利彦先生を偲ぶ

谷川久一

浪久利彦先生は昨年11月21日未明、故郷である千葉県木更津市で御他界されました。市田文弘先生に次いでこの研究会の最初より顧問として御指導戴いた先生を失ったことになり、ことに私にとってはこの上もなく淋しい気持ちです。享年83才でした。

浪久先生は昭和22年東京大学を卒業された後、昭和30年より順天堂大学医学部で講師、助教授、教授として同大学の消化器内科を育てられ、現在同大学消化器内科を主宰されている渡辺純夫教授は先生の愛弟子にあたります。

私自身、先生とは学会、研究会さらには雑誌の編集委員会など、さまざまところで御一緒させて戴き、御指導戴きましたが、まず思い出されるのが、第20回日本肝臓学会総会（会長 森亘教授）でのシンポジウム“肝類洞壁細胞の形態と機能”を先生と御一緒に司会をつとめた時のことです。このシンポジウムで先生は特別発言者として、現在名称が統一された肝星細胞（hepatic stellate cell, HSC）の発見者である伊東先生をお呼びしようと提案され、私もそれは良いことと、伊東先生にご足労をお願いしました。その際、伊東先生は大変お喜びになったのを覚えています。

伊東先生はHSCのお仕事で学士院賞をお受けになりましたが、その際、私に毛筆で、「私がこの賞を戴いたのは、先生方がこの細胞が大変臨床にも重要な細胞であることを示されたおかげです。」と、お手紙を戴いたことを思い出しております。そういえばWisse教授の主催されていた国際クッパー細胞シンポジウムで、このHSCの名称

を統一しようという提案がありました。私自身は伊東先生の名付けられたfat storing cellという名称を当時使っておりましたが、多くの方々は先生の名をとってIto cellと呼び、アメリカの連中はlipocyteという名称を多く用いていました。その討議で普段あまり発言されない浪久先生は、ずっと立ち上がられ、発見者の伊東先生の名のついたIto cellが良いと発言されたことです。先生の教室では今もHSCの研究をされていますが、同細胞にデスマンが存在すること、そしてこの細胞の良いマーカーであることを示され、Wisse教授は浪久先生をミスターデスマンと呼んでおられました。

先生は外見は物静かで穏やかで、いつも微笑んでおられる様子でしたが、曲がったことが大嫌いで、筋の通った立派な物の考えをされる方でした。

私自身は、市田先生に次いで浪久先生も他界され、現在犬山シンポジウムをはじめ、いくつかの研究会の代表世話人をつとめておりますが、早く次の世代に代わって戴くことを強く願っている今日この頃です。浪久先生のご冥福を心より祈って筆をおきます。



(1991年7月)

ビルバオの思い出に感謝を込めて

新潟大学大学院医歯学総合研究科
細胞機能講座分子細胞病理学分野
内藤 眞

第13回国際肝類洞壁細胞シンポジウム(2006年9月3 - 6日)を新潟でお世話させていただき、後片付けも終わってほっとしていた時、新聞で浪久利彦先生の訃報に接した。浪久先生には「研究内容から、先生は解剖の先生かと思っていましたよ。」などいつも気楽に声をかけていただき、励ましていただいていた。

2年前の国際肝類洞壁細胞シンポジウムはスペインのビルバオで開催された。日本からも多くの参加者があり、その中に浪久先生のお姿もあった。奥様と二人のお嬢様も一緒だった。私の家内は初対面にもかかわらず浪久先生ご一家と学会中に近郊のアルタミラ、サンテジャーナ・デル・マルの見学に同行させていただいた。下のお嬢様がマイクロバス、案内等全ての手配をコーディネートされ、お陰で家内は一般観光では経験できない貴重な時間を持つことができました。浪久先生の奥様、お嬢様、和気夫人、小田夫人、塚本夫人とご一緒に、旧石器時代へ、中世の貴族の館へとタイムスリップした思い出は家内にとって忘れられないものになった。このツアーはもともと浪久先生のご希望であったが、先生は体調を気遣ってアルタミラには行かれなかった。どんなにか残念だったと思う。しかし、その日の夕方のUrbaidai自然公園へのツアーやシードルの館では参加者と一緒に楽しんでおられた。とてもおしゃれな先生で、ピンク地にプリントのある素敵なシャツをお召しだった(写真1)。家内が「とてもよくお似合いですね。」と言うと、「内藤先生にも作ってさしあげたらいかがですか。」というお言葉と笑顔が返ってきた。



写真1 (2004. 9. 7)

Urbaidai自然公園へのツアーの後、シードルの館にて。
左2人目から Balabaud先生、白鳥先生、浪久先生。

最終日、Artaza宮でのバンケットでは、同じテーブルで食事をする機会に恵まれた(写真2, 3)。ビルバオでの先生は、ニコニコと柔和な表情が印象的であった。奥様やお嬢様への穏やかな話し方がその場の空気を和ませてくれた。暖かなご家族の様子が羨ましく感じられた。家内にとって初めてのスペインであり、印象深く楽しい旅行を思い起こす時、浪久先生の優しい笑顔が脳裏に浮かぶという。家内とともにビルバオでのご家族との出会いに感謝しつつ、心からご冥福をお祈りいたします。



写真2 (2004. 9. 8) Artaza宮の庭にて。
ご家族とご一緒に。



写真3 (2004. 9. 8) Artaza宮での晩餐会。
ご家族とご一緒に。右端は筆者の妻。

第20回肝類洞壁細胞研究会を 主催して

山梨大学医学部外科学講座第一教室
藤井秀樹

第20回肝類洞壁細胞研究会を12月2日、3日にわたって、富士山の裾野に位置する、山梨県富士吉田市のホテルハイランドリゾートで開催させていただきました。



会員の皆様のおかげを持ちまして、演題数も20題を越え21題となりました。この21題はその領域が、肝線維化と伊東細胞、NASH、肝炎とKupffer細胞、肝細胞癌、肝再生、肝類洞壁細胞の形態と極めて多岐にわたり、肝類洞壁細胞がまさにあらゆる肝疾患に関与しているとの強い印象を受けました。そういう意味で、今回の研究会は、肝類洞壁細胞研究がまさにこれからの肝臓病学の中心的な研究領域になることを彷彿とさせるものであったと考えております。

このことは、今回の研究会が第20回という節目の会であることから、本研究会の生みの親、育ての親でもあられる谷川久一先生にお願いしました特別講演「肝類洞壁細胞研究のあゆみとこれから」のなかでも語られ、参加された先生方にも強く印象付けられたのではないかと思います。

またイブニングセミナーでは岡崎勲教授に「肝類洞微小環境の改善-HGFの関与を中心に-」を御講演いただきました。先生のご研究のあゆみとそして肝類洞微小環境が肝発癌にも関与しているという新しい知見が語られました。研究者の姿勢を教えていただいたのと同時に、やはり肝類洞壁細胞研究がさらに新しい方向に発展してゆくのだと確信いたしました。さらに山梨大学医学部解剖学教室の大野伸一教授には「生体凍結技法による動的細胞組織の機能分子形態学的解析」という御演題で御講演いただきましたが、肝類洞壁の形態を論ずるときに従来の病理学的手法による解析でよいのかと思わざるを得ない衝撃的な内容でした。これからの肝類洞壁細胞研究に新しい局面を開くものと考えます。

さて、今回の研究会の参加人数は、過去の研究会の中ではもっとも少ない43名でした。開催地があまり交通の便の良くない富士山の裾野であったせいもあるかもしれませんが、当番世話人として多少責任を感じております。一方で、若い先生方の参加がきわめて少なかったのも原因ではないかと思っております。私どもの施設からは肝臓の研究をしている大学院生3名をスタッフとして参加させましたが、3名とも非常に刺激され研究へのモチベーションが高まったようです。この研究会が極めてレベルの高い内容であるにも関わらず、1演題ごとに活発な討議がなされるが故だと思います。演者の先生方、座長を務めていただきました先生方をはじめ、参加された先生方にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

しかしながら、若い先生方の参加が少ないということは、これからの肝類洞壁細胞研究会のあり方を考えるときに重要な問題であると思えます。本研究会が発足して20年が経過しました。20年前に、私もそうでしたが、何か惹かれるように久留米に向かった先生方も、今はそれぞれ重要なお立場に立たれています。今本研究会に必要なのは20年前の私たちと同じような若い、そして熱い先生方であろうと考えております。

第21回の肝類洞壁細胞研究会は愛媛大学医学部第3内科の恩地森一教授の当番世話人のもと開催される予定です。若い先生方と一緒に愛媛でお会いしましょう。

最後に手前勝手ではありますが、今回の研究会の準備に全力を尽くしてくれました河野寛先生をはじめとする教室員、また浅川美和子さんをはじめとする秘書の皆さんに感謝しまして、第20回肝類洞壁細胞研究会の御報告にさせていただきます。



第21回肝類洞壁細胞研究会のお知らせ

第21回肝類洞壁細胞研究会を下記の日程で開催いたします。

会期：平成19年12月22日(土)・23日(日)
 会場：ホテル奥道後
 演題締切日：平成19年9月30日(日)

ぜひとも多数のご参加をいただきますよう、お知らせいたします。

尚、特別講演、締切日以外の演題募集要項に関しては、現在未定です。決定次第、会員の皆様に連絡差し上げます。

第21回当番世話人
 愛媛大学先端病態制御内科学
 恩地森一

肝類洞壁細胞研究会会則

第1条 名称

本会は、肝類洞壁細胞研究会と称する。

第2条 目的

本会は、肝類洞壁細胞に関連する諸問題の研究の発展と向上を図り、研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事業

本会は、年1回の研究集会の開催、ならびに前条(第2条)の目的を達するため必要な事業を行う。

第4条 会員

本会の会員は次のとおりとする。

1. 個人会員：第2条の趣旨に賛同する個人
2. 賛助会員：本会の目的に賛同する法人、団体あるいは個人

第5条 会費

会員は、別に定める会費を納入するものとする。

第6条 入会および退会

1. 本会に入会を希望するものは、事務局に申し込むものとする。
2. 本会からの退会を希望するものは、その旨を事務局に届け出るものとする。
3. 連続して2年間会費を納入しなかったものは自動的に退会とみなす。

第7条 役員

本会は次の役員をおく。

- 顧問 若干名
 世話人 若干名
 幹事 若干名

第8条 役員会

研究会に先立ち役員会を開催し、次回研究会の会長、開催場所の選定を行う。

第9条 会費および経費

本会の経費は会費、寄付金をもってこれにあてる。

第10条 会則変更

会則変更は、役員会の議を経て行う。

第11条 事務局

本会の事務局は、平成11年1月より下記におく。
 〒839-0864 福岡県久留米市百年公園1番1号
 久留米リサーチセンタービル研究棟2階
 米国公益法人 国際肝臓研究所 内
 肝類洞壁細胞研究会事務局

Tel. 0942-31-1231

Fax. 0942-31-1232

内規 会費は当分の間、個人会員は年7,000円とする。
 付則 本会則は平成6年10月1日より施行する。

平成17年度 肝類洞壁細胞研究会(事務局分)

会計報告

(H.17.10.1 - H.18.9.30)

【収入】	前年度繰越金	3,095,314
	年会費(7,000円×125名)	609,000
	利息	181
	計	3,704,495
【支出】	交通費	682,000
	宿泊費	198,000
	事務費	109,075
	次年度繰越金	2,715,420
	計	3,704,495

肝類洞壁細胞研究会役員(2007.1現在)

【顧問】円山英昭, 沖田 極, 小俣政男, 白鳥康史,
 藤原研司【代表世話人】谷川久一【世話人】有井滋樹,
 市田隆文, 上野隆登, 岡崎 勲, 岡上 武, 織田正也,
 恩地森一, 河田則文, 妹尾春樹, 内藤 眞, 藤井秀樹,
 宮崎 勝, 持田 智, 和氣健二郎, 渡辺純夫
 【幹事】坂井田 功, 高原照美, 竹井謙之, 野口和典

編集後記

記念すべき第20回の研究会は、藤井教授主催により、そして素晴らしい富士山の見える富士吉田で行われ、盛会でした。心より藤井先生ならびに教室の皆様の御苦勞に心よりお礼申し上げます。

肝類洞壁細胞研究も、まだまだ明らかにされなければならぬ多くの重要なテーマがあり、これからもこの研究会を続けていこう、ということになりました。ことに近年innate immunityと肝障害が注目され、ことに類洞壁細胞がこれに深く関わっていることから、この方面での発展も期待されます。次回の愛媛大学、恩地森一教授主催の研究会が楽しみです。

今後、この研究会を継続するからには、さらに有意義な会にして行かなければ、と考えております。会員の皆様のさらなる御協力をお願いします。(谷川久一)

SINUSOID NEWS 編集部

編集長 和氣健二郎

編集委員：谷川久一、内藤 眞

107-0052 東京都港区赤坂 8-10-22

(株)ミノファーゲン製薬 肝臓リサーチ・ユニット内

FAX: 03-3402-6397

E-mail: wake@minophagen.co.jp

印刷：肝類洞壁細胞研究会事務局(福田史子)
 839-0864 福岡県久留米市百年公園1番1号
 久留米リサーチセンタービル研究棟2階
 米国公益法人 国際肝臓研究所内
 TEL: 0942-31-1231, FAX: 0942-31-1232
 E-mail: tanikawa@kurume.ktarn.or.jp